

混合クラスでの当番活動の提案

《考える子ども》身近な自然物や具体物にかかわりながら、感じたり、考えたりしたことを伝え合う。友達とかかわり、相手の思いや動きに応じながら遊びや生活をつくり出す。

～花巻市立小山田保育園～

☆ 視点にかかわる背景(7月後半～8月) ☆

4, 5 歳児の混合クラスである。その中で、思うようにいかないとかんしゃくを起したり、怒鳴ったり、時に手が出たりする子、またはとてもマイペースで周りの子が次のことを始めていても焦ることなく行動している子がいるクラスである。5 歳児ではあるが、幼さが見られる。小規模園では、子ども同士の学び合いが課題となっている。

☆ 具体的事例 ☆

子どもの姿・子ども同士のかかわり

クラスで飼うことになったカブトムシの世話を誰がするのかということにきっかけに 5 歳児だけの役割を作ることになる。話し合いの中で「生き物の世話」「テーブル拭き」「絵本の整理」に決まる。子どもたちの提案から、それをグループ毎に交代して行うことにする。

- 生き物の世話を苦戦しながらもする A の姿を、同じグループの 4 歳児 B が見ていた。
- B: いいなあ・・・。僕もやってみたいなあ。
A: だめだよ。これは難しいから年長さんの仕事だからね。



- 生き物の世話をしているグループの子の姿を見て、絵本整理の係の子が気付く。
- C: まだ絵本を読んでいる人がいないから本棚はきれいだね。
D: そうだね・・・。そうだ！ 昼に読んだ後に絵本がバラバラになるからその時は？
C: いいね。
D: 先生、絵本の整理はお昼寝の前にしてもいい？
その後、自分達で気付いてしようとする姿が見られるようになってきた。また、「テーブル拭きは〇〇グループだよ。まだやってないよ。やるんだよ。」と他のグループの仕事についても気付いて知らせるようになってきた。



- <10 月後半から>
「これは僕がやったから、そっちを E 君やって。」「分かった。」「それもう私がやっておいたよ。」「F ちゃん早くしてよ。絵本整理できないよ。」「先生、当番表変え忘れてるよ。昨日僕たちやったから。」
というように、グループの仕事として仲間に声をかけて係の仕事をしようとする姿が見られるようになってきた。

保育者の援助・視点



- 当番のやり方が分かるまで何回か取り組む時間を設ける。5 歳児の姿を 4 歳児も「見ていていいよ。」というようにする。4 歳児が見ているという中で、5 歳児だけの特別感を味わっている様子があった。

- 当番の仕事に慣れてきたところで、「今の時間だとカブトムシやザリガニの世話ができそうだよ。」「テーブル拭きは今しないとみんな困っているようだね。」と時間を設けるのではなく、自分達で気付いてできるように声をかける。
- 絵本の状態、いつするといいのか気付いたグループをよく褒め、周りの子達へも伝える。
- このように気付くようになってきてから、周りへも目が向くようになってきた。自分の役割から 5 歳児の仲間の役割というように視野が広がってきている。



- 当番表を変えて知らせる程度にし、保育者は見守るようにした。仲間に声をかけて仕事の役割も少しずつ分担するようになってきた。
- 当番活動も丁寧にするようになってきて、ザリガニの水槽を隅まで洗ったり、絵本をシールで分けたりするだけではなく、大きさを揃えるようになってきて、工夫している様子が見られる。

☆ 接続期の指導場面における配慮事項 ☆

子どもたちは役割をもつことで意欲がわき、自ら気づいてやったことを見てくれている人がいること、認められることで達成感につながっている。また、グループとして活動することで、周りのことやグループの仲間のことを意識して見るようになり、視野が広がってきた。

保育者は子どもたちの「自分達でやりたい」という自立の気持ちを引き出す環境構成をし、試行錯誤しながら活動できる十分な時間と場を保障するようにすることが重要である。自分達で考えて動いていることを認め、子どもたちへ徐々に任せようとしている。小規模園であるが故に仲間同士での深いかかわりを意図的に組んでいく必要があり、遊びや生活の中で必要感や充実感をもてるように、幼児理解と保育のつながりに配慮している。